

資料

日本の看護研究における自己効力感についての検討

－ 1998 年以降の文献レビューを中心に－

片倉 裕子

(2018年10月19日受稿)

抄録： 看護研究に、20 年位前から「自己効力感」が取り入れられるようになった。本研究は、看護研究の文献検討から「自己効力感」の定義とその指標である構成要素を明らかにすることを目的とした。医学中央雑誌 Web で 1998 ～ 2017 年に公表された看護系論文で、キーワードに「看護学生」、「自己効力感」、「臨地実習」が含まれる 104 件から原著論文 23 件を抽出し記述的に研究をした。自己効力感は、「個人がある状況において必要な行動を効果的に遂行する可能性の認識である」、「ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の確信である」と定義づけた。選択した文献のうち、尺度開発が 6 件、尺度を用いた量的研究が 13 件、インタビュー等の質的研究が 4 件に 3 分類された。研究の分類から、尺度を用いた量的研究が多く、研究者自身で尺度開発をしていた。尺度開発で、看護技術、ストレス耐性、他者との人間関係性を測る尺度で多くは客観性に乏しかったが、看護学独自の内容を模索していた。質的研究では、Bandura, A.²²⁾ が提唱する 4 つの情報源を基に学生に教員が指導する上での重要な教授方法が具体的に示唆されていた。

キーワード：看護学生、自己効力感、臨地実習、看護研究、構成要素

I. 緒言

看護学教育は、学内での知識の修得、演習での看護技術を学習した上で、実習施設で実践をすることが必要である。特に臨地実習（以下実習）は、病院や施設という環境の変化があり、発達段階や病状等が異なる患者に、知識と看護技術を統合し実践を通して学ぶ場である。学習の途上にある看護学生（以下学生）は、知識と看護技術を統合する時に、身体的変化、精神的変化が顕著に現れることがある³⁰⁾。学生が自己効力感を高めて学習を行うことが望まれるが、自己効力感の低い大学生は、全体の40%を占め³⁾、看護系大学の4年生で低く¹¹⁾、職業人として自立するための心理的準備状態は低いとの報告¹⁹⁾がある。教員は、学生が実習で意欲的に継続して取り組むために、教授する上での方策を考えることが必要である^{20) 26) 36)}。

看護の研究で自己効力感が取り入れられるようになって、Bandura, A.²²⁾ が、社会学習理論³⁾の中で提唱している自己効力感（Self-Efficacy）に基づいた看護研究が行われてきた。自己効力感の認識に影響を与える4つの情報源を活用した研究が多数ある。1998年以降、看護研究で学生と自己効力感について、尺度の開発^{8) 16) 18) 26) 29) 34)}、インタビュー等による質的研究^{13) 14) 17) 36)}、尺度を用いた研究^{2) 4) ～6) 9) ～11) 27) 30) ～33) 35)}があった。これまで研究がされてきた中でキーワードである「看護学生」「自己効力感」「臨地実習」が含まれる文献を検討することが必要であると考えた。

II. 研究目的

本研究は、看護研究の文献検討から「自己効力感」の定義とその指標である構成要素を明らかに

することを目的とした。

Ⅲ. 研究方法

研究方法是、文献検討による記述的研究である。

1. 研究対象

医学中央雑誌Webで1998～2017年に公表された看護系論文で、キーワードに「看護学生」「自

己効力感」「臨地実習」が含まれる論文104件から原著論文23件を研究対象とした。研究対象が看護学生以外の新卒看護師や教員等は除外した。臨地実習での学生の自己効力感の研究、技術演習で学生の自己効力感の研究、学生と自己効力感の研究を論文とした。対象文献は表1で、文献と研究方法を記述した。

表1. 対象文献と研究方法の一覧

文献番号	著者名 (筆頭者)	タイトル・サブタイトル	発行年	研究方法
1	山崎 章恵	患者との関わりにおける看護学生の自己効力感 (Ⅰ) -測定尺度開発の試み-。信州大学医療技術短期大学部紀要, 24, 61-69.	1998	尺度開発
2	百瀬由美子	患者との関わりにおける看護学生の自己効力感 (Ⅱ) -基礎看護実習前後の比較と自己効力感を高める要因-。信州大学医療技術短期大学部紀要, 24, 71-79.	1998	尺度を用いた量的研究
3	遠藤 恵子	看護学生の自己効力感 (Self-Efficacy) に関する研究 (第1報) -基礎看護技術演習による自己効力感の変化と影響する要因-。山形医療研究, 2, 19-29.	1999	尺度開発
4	松永 保子	看護学生の自己効力感 (Self-Efficacy) に関する研究 (第2報) -看護学生の背景と自己効力感の関連-。山形医療研究, 2, 15-21.	1999	尺度を用いた量的研究
5	遠藤 恵子	看護学生の自己効力感 (Self-Efficacy) に関する研究 (第3報)。山形医療研究, 3, 9-15.	2000	尺度を用いた量的研究
6	山崎 章恵	看護学生の臨地実習前後における自己効力感の変化と影響要因。信州大学医療技術短期大学部紀要, 26, 25-34.	2000	尺度を用いた量的研究
7	山崎 章恵	看護学生の自己効力感を高める実習指導の検討-自己効力感の低い学生の実習中の体験から-。信州大学医療技術短期大学部紀要, 27, 41-48.	2001	インタビューの質的研究
8	奥津 文子	効果的な臨地実習指導方法の検討-学生の自己効力感の変化と実習満足度からの一考察-。京都大学医療技術短期大学紀要, 22, 33-41.	2002	尺度を用いた量的研究
9	佐々木和義	看護臨地実習における学内事前実習がセルフエフィカシーに及ぼす影響: 母性看護学実習の場合。ヒューマン研究, 3, 22-29.	2002	尺度開発
10	小田日出子	看護学生の社会的スキルと自己効力感に関する研究。西南女学院大学紀要, 27, 37-46.	2003	尺度を用いた量的研究
11	下村 英雄	臨地実習前後の看護技術に対する自己効力感の変化と関連要因。カウンセリング研究, 38, 98-108.	2005	尺度開発
12	眞鍋えみ子	看護学生の臨地実習自己効力感尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討。日本看護研究学会雑誌, 30(2), 43-53.	2007	尺度開発
13	毛利 貴子	臨地実習中の看護学生におけるストレスコーピングと臨地実習自己効力感との関連。京都府立大学看護紀要, 17, 65-70.	2008	尺度を用いた量的研究
14	水木 暢子	臨地実習における看護学生の看護実践活動に対する自己効力感の検討。秋田看護福祉大学地域総合研究所研究報告統合3, 15-22.	2008	尺度開発
15	阿部 智美	患者とのコミュニケーションにおける看護学生の自己効力感-実習体験, コミュニケーションスキル, 一般性自己効力感との関連から-。宮城大学看護学部紀要, 11(1), 43-48.	2008	尺度を用いた量的研究
16	飯島佐知子	自己効力感および職業レディネスによる看護大学生の看護管理実習の効果の評価に関する研究。愛知県立看護大学紀要, 14(9), 9-18.	2008	尺度を用いた量的研究
17	市川 茂子	基礎看護学実習Ⅱにおける学生の自己効力感と看護過程展開の達成度との関連。横浜創英短期大学紀要, 7, 35-42.	2011	尺度を用いた量的研究
18	狩谷 恭子	アロマテラピーマッサージ実施後の患者インタビューに学生が同席する意味。臨地実習における学生の自己効力感を高める学習方法の考察。医療保健学研究, 2, 117-129.	2011	インタビューの質的研究
19	村田 尚恵	看護学生の精神的回復力と臨地実習自己効力感および実習満足度の学年比較。第42回日本看護学会論文集。看護教育, 38-41.	2012	尺度を用いた量的研究
20	岩谷久美子	看護学生の母性看護実践に対する自己効力感-母性看護学実習前後の比較-。医学と生物学, 156(9), 644-649.	2012	尺度を用いた量的研究
21	佐藤美紀子	成人看護学実習 (急性期) における看護学生の成功体験。島根大学医学部紀要, 35, 39-46.	2012	質問紙を用いた質的研究
22	片倉 裕子	看護学生が臨地実習で自己効力感を高める要因-4年次実習を終了した学生へのインタビューの質的記述的研究-。母性衛生, 54(4), 486-494.	2014	インタビューの質的研究
23	山下美智子	看護学生の看護実践に対する自己効力感とその影響要因-情報源に着目した自己効力感モデルの検証-。畿央大学紀要, 11(2), 17-25.	2014	尺度を用いた量的研究

2. 分析方法

- 1) 選択した文献を精読して、自己効力感に関する記述を抽出した。
- 2) 文献中の自己効力感の定義を分類した。
- 3) 文献中の自己効力感に用いられた研究方法に着目して分類した。

IV. 結果

1. 自己効力感の定義

選択した文献23件のうち、各文献の自己効力感

の定義と引用文献は表2-1と表2-2に示した。引用文献で表2-1は主に、自己効力の探究「社会的学習理論の新展開」²³⁾、社会的学習理論—人間理解と教育の基礎—²⁴⁾、表2-2は、Self-efficacy²²⁾、激動社会の中の自己効力感⁴⁾からだった。Bandura, A.²²⁾の理論に基づいて、少数だったが、看護学生の臨地実習自己効力感尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討²⁶⁾、自己効力感、看護実践に活かす中範囲理論¹⁾の文献から引用をしていた。

表2-1. 自己効力感の定義

文献番号	著者名(筆頭者)	自己効力感の定義	引用文献
1	山崎 章恵	①自分で実際にやって体験してみること、②他人の成功や失敗の様子を観察することによって、代理的体験をもつこと、③自分にはやればできる能力があるのだ、ということを他人から言葉で説得させ、社会的な影響を受けること、④自分自身の有能さや調書や欠点を判断するより所となるような生理的体験を自覚すること、によって内発的に高められていくものである	Bandura, A.: 社会的学習理論—人間理解と教育の基礎—, 金子書房, 1980 Bandura, A.: 自己効力の探究「社会的学習理論の新展開」, 金子書房, 1985
2	百瀬由美子	体験を通して個人が自ら作り出してゆくものであり、それを高める情報源として、「行動の達成」「代理的体験」「言語的説得」「情動的状态」の4つを提唱している	Bandura, A.: 社会的学習理論—人間理解と教育の基礎—, 金子書房, 1980 Bandura, A.: 自己効力の探究「社会的学習理論の新展開」, 金子書房, 1985
3	遠藤 恵子	積極的に課題に取り組むような認識を意図的に働かせることであり、これが行動の開発や学習への自信や意欲を促す。自然発生的に生じるのではなく、個人が自ら作り出していくもので、「遂行行動の達成」「代理的体験」「言語的説得」「生理的情動的状态」の4つの情報により生み出される	Bandura, A.: 自己効力の探究「社会的学習理論の新展開」, 金子書房, 1985
4	松永 保子	自己効力感はひとりでに湧き出てくるものではなく、よく自覚して主体的に考えて、自分にはここまでできるのだということを見出すことによって、内発的に作り上げられるものであり、「遂行行動の達成」「代理的体験(モデリング)」「言語的説得」「生理的情動的状态」の4つの情報により作り出される	Bandura, A.: 社会的学習理論—人間理解と教育の基礎—, 金子書房, 1980 Bandura, A.: 自己効力の探究「社会的学習理論の新展開」, 金子書房, 1985
5	遠藤 恵子	ある行動の先行要因としてその行動の遂行を促進・抑制するものである。つまり、積極的に課題に取り組み、学習への自信や意欲を促すものである。「遂行行動の達成」「代理的体験」「言語的説得」「生理的情動的状态」の4つの情報を巧みに合わせることににより自己効力感が高まる	Bandura, A.: 自己効力の探究「社会的学習理論の新展開」, 金子書房, 1985
6	山崎 章恵	自己効力感を高めると考えられる情報源に、「行動の達成」「代理的体験」「言語的説得」「情動的状态」が関与している	Bandura, A.: 自己効力の探究「社会的学習理論の新展開」, 金子書房, 1985
7	山崎 章恵	ある課題を遂行しようとする際、それをどの程度効果的に遂行できると考えているかという個人の認知を重視している。自己効力感を高める「行動の達成」「代理的体験」「情動的状态」が関与する	Bandura, A.: 社会的学習理論—人間理解と教育の基礎—, 金子書房, 1980
8	奥津 文子	何らかの課題を達成するためにある種の能力が必要であるという信念、さらに自分はその能力を発揮することができるという確信を示している	Bandura, A.: 自己効力の探究「社会的学習理論の新展開」, 金子書房, 1985
14	水木 暢子	個人がある状況において必要な行動を効果的に遂行する可能性の認知である。①自分で実際にやってみて体験すること(行動の達成)、②他人の成功や失敗の様子を観察することによって、代理性的経験をもつこと(代理的経験)、③自分にはやればできる能力があるのだ、ということを他人から言葉で説得させ、社会的な影響を受けること(言語的説得)、④自分自身の有能さや長所や欠点を判断するより所となるような生理的体験を自覚すること(情動的状态)によって内発的に高められる	Bandura, A.: 社会的学習理論—人間理解と教育の基礎—, 金子書房, 1980
15	阿部 智美	ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の確信である	Bandura, A.: Self-efficacy, 191-215, 1977 Bandura, A.: 自己効力の探究「社会的学習理論の新展開」, 金子書房, 1985
17	市川 茂子	ある行動を起す前に個人がそのことを遂行できそうであると感ぜられる確信である	Bandura, A.: 自己効力の探究「社会的学習理論の新展開」, 金子書房, 1985
23	山下美智子	ある課題を達成する能力が自分にあるという個人の確信である。影響を及ぼす4つの情報源は、「制御体験」「代理体験」「社会的説得」「生理的、感情的状態」を提唱している	Bandura, A.: 社会的学習理論—人間理解と教育の基礎—, 金子書房, 1980

表2-2. 自己効力感の定義

文献番号	著者名 (筆頭者)	自己効力感の定義	引用文献
9	佐々木和義	成功体験, モデリング, 言語的説得, 情動的喚起が重要である	Bandura, A.: Self-efficacy, 191-215, 1977
10	小田日出子	個人の行動遂行能力に対する確信である	Bandura, A.: Self-efficacy, 191-215, 1977
11	下村 英雄	4つの源泉の一つとして, 実際の遂行体験が挙げられている	Bandura, A.: 激動社会の中の自己効力感, 金子書房, 1997
12	眞鍋えみ子	自分にはこれだけのことができるという主観的な判断である	Bandura, A.: 激動社会の中の自己効力感, 金子書房, 1997
13	毛利 貴子	ある結果を生み出すために必要な行動をどううまく行うことができるかという確信である	Bandura, A.: Self-efficacy, 191-215, 1977
16	飯島佐知子	ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の確信をいう遂行体験, 代理体験, 言語的説得, 情動的喚起の4つの情報を通じて個人が作り出すものである	Bandura, A.: Self-efficacy, 191-215, 1977
18	狩谷 恭子	ある特定の場面で遂行される特定の行動に影響を及ぼすという意味で, ある行動に対する自信・確信のことをいう。自己効力感を高める4要因として, ①遂行行動の達成, ②代理的体験, ③言語的説得, ④情動的喚起がある	—
19	村田 尚恵	学生が臨地実習において, 援助的人間関係の形成や専門職者としての役割や責務を果たせようという気持ちや看護の方法について「実践できそうだ」という自信のことである	眞鍋えみ子他: 看護学生の臨地実習自己効力感尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討, 日本看護研究学会雑誌, vol30, No.2, 43-53.
20	岩谷久美子	ある行動を起す前にその個人が感じる遂行可能性である	Bandura, A.: 激動社会の中の自己効力感, 金子書房, 1997
21	佐藤美紀子	課題を遂行する際の「～できる」という見通しや確信であり, 「成功体験」が最も影響を及ぼす要因である	青柳道子: 自己効力感, 野川道子編, 看護実践に活かす中範囲理論, 282-299, メヂカルフレンド社, 2012
22	片倉 裕子	自己効力感を高めると考えられる情報源に, 「遂行行動の達成」「代理的体験」「言語的説得」「情動の状態」が関与している	Bandura, A.: 激動社会の中の自己効力感, 金子書房, 1997
23	山下美智子	ある課題を達成する能力が自分にあるという個人の確信である。影響を及ぼす4つの情報源は, 「制御体験」「代理体験」「社会的説得」「生理的, 感情的状態」を提唱している	Bandura, A.: 社会的学習理論—人間理解と教育の基礎—, 金子書房, 1980

2. 研究の分類

抽出した文献23件のうち, 尺度開発が6件, 尺度を用いた量的研究が13件, インタビュー等の質的研究が4件で3分類することができた。研究の分類から, 尺度を用いた量的研究が多く, 表3に使用尺度と結果を示した。

1) 尺度開発

尺度開発が6件あり, 文献1は, 学生が患者との関係性において, 「受容的態度」, 「専門的態度」, 「尊重的態度」から構成され, 23項目4件法で自己効力感尺度の開発, 文献3は, 学生本人が認識する自己効力感を促進する情報を測定するために, 「遂行行動の達成」, 「言語的説得」, 「生理的情動の状態」の3つの情報から12項目2件法で, 自己効力感促進尺度の開発, 文献9は, 母性看護学実習で行う看護技術25項目7件法で, 母性看護SE (self-efficacy) 尺度の開発, 実習中の学生を評価する立場にある看護師, 指導者, 他の学生等からの評価20項目5件法で, 母性看護FNE (Fear

of negative evaluation) 尺度の開発, 文献11は, 「基礎的な看護技術」, 「高度な看護技術」, 「コミュニケーション」, 「問題発見, 問題解決」の4つの因子から55項目5件法で, 看護活動における自己効力感尺度の開発, 文献12は, 「対象者の理解・援助効力感」, 「友人との関係性維持効力感」, 「指導者との関係性維持効力感」から構成され, 16項目6件法で臨地実習自己効力感尺度の開発, 文献14は, 「人間関係形成技術」, 「基本的看護技術」, 「アセスメント技術」, 「ストレス耐性」から構成され, 24項目5件法で看護実践活動に対する自己効力感尺度を開発していた。共通しているのは, 看護技術と人間関係性を尺度項目にしていることであった。文献1と文献12は, 信頼性・妥当性が証明されていた。

2) 尺度を用いた量的研究

用いられた主な尺度は, 「特性的自己効力感尺度 (Generalized Self-Efficacy) 尺度」²¹⁾ が3件

表3. 尺度を用いた量的研究の概要

文献番号	著者名(筆頭者)	使用尺度	結果
2	百瀬由美子	山崎章恵・百瀬由美子・阪口しげ子「自己効力感尺度」1998 Banduraの情報源の5件法	2年短期大看護学生の患者との関わりにおける看護学生の自己効力感尺度では、「受容的態度」「専門的態度」「尊重的態度」の3つの下位尺度とBanduraの情報源「行動の達成」「代理的体験」「言語的説得」との間に有意な正の相関が認められた
4	松永 保子	Sherer(成田健一訳)「特性的自己効力感尺度」1995	1年男女短期大看護学生の入学直後の自己効力感の高さは、必ずしも統計的な一致は認められない。Banduraの情報源「代理的体験」は、家族に看護職がいることで相対的に自己効力感が高くなる。「遂行行動の達成」は、統計的な有意差は認めなかった
5	遠藤 恵子	坂野雄二, 東條光彦「一般性セルフエフィカシー尺度」1986 遠藤恵子他「自己効力感促進尺度」1999	1年男女短期大看護学生の一般性セルフエフィカシー尺度では、血圧測定の際に演習後は有意に増加した。導尿の際に演習後、Banduraの情報源「言語的説得」で有意に増加した
6	山崎 章恵	山崎章恵・百瀬由美子・阪口しげ子「自己効力感尺度」1998	2年短期大男女看護学生実習後の「受容的態度」「専門的態度」「尊重的態度」の3つの下位尺度得点は、実習前より有意に高くなった。Banduraの情報源「行動の達成」「代理的体験」「情動的状態」との間に有意な正の相関が認められた。「言語的説得」は専門的態度の時にみずの相関が認められた
8	奥津 文子	Sherer(成田健一訳)「特性的自己効力感尺度」1995	3年男女短期大看護学生の実習前と比較して実習後が、自己効力感の高い学生が有意に多かった。自己効力感の高い学生に満足度が高かった
10	小田日出子	菊池章夫, 堀毛一也「社会的スキル尺度」1988 坂野雄二, 東條光彦「一般性セルフエフィカシー尺度」1986	社会的スキル尺度では、看護学生の社会的スキルの平均値は、4年女子大学生を除き高かった。一般性セルフエフィカシー尺度では、自己効力感の平均得点は4年生で低かった。社会的スキルと自己効力感の間には、全学年共にやや高い相関が認められた
13	毛利 貴子	眞鍋えみ子他「臨地実習自己効力感尺度」2007 佐々木恵, 山崎勝之「コーピング尺度(General Coping Questionnaire)」2002	3～4年男女看護大学生の臨地実習自己効力感、対象の理解・援助効力感、友人との関係性維持効力感、指導者との関係性維持効力感と共に高群と低群であるが、3つの下位尺度でどれか一つの自己効力感を向上させることで全般的に自己効力感も向上することが示唆された。ストレスコーピングでは、女性は男性より情緒的サポート希求、4年生は3年生より情緒的サポート希求、認知的再解釈、問題解決を行うことが確認された
15	阿部 智美	Banduraの情報源の4件法 坂野雄二, 東條光彦「一般性セルフエフィカシー尺度」1986 堀一也「基本的スキルを測定する尺度」1994	4年看護系大学、3年短期大学、高等専門学校の3年生(カリキュラムの看護実習を終了している)の一般性セルフエフィカシー尺度では、患者とのコミュニケーションの自己効力感と実習経験、コミュニケーションスキルの一部と一般性自己効力感の間には正の相関が確認された。「遂行行動の達成」「言語的説得」の経験が患者とのコミュニケーションの自己効力感強く関連していることが示された
16	飯島佐知子	坂野雄二, 東條光彦「一般性セルフエフィカシー尺度」1986 浦上昌則「進路選択に対する自己効力感尺度」1995 若林満, 後藤宗理, 鹿内啓子「職業レディネス尺度」1983 飯島佐知子他「看護就業レディネス尺度」2007	3～4年看護大学生の進路選択の自己効力感尺度得点、職業レディネス尺度得点、看護就業レディネス尺度得点が、実習後に有意に高かった。実習を通じて学生が自分の新卒時の看護師像を具体的にイメージすることができるようになったことから(遂行体験)、今後管理実習は履修した学生の進路選択に対する自己効力感を高めたと考えられる
17	市川 茂子	坂野雄二, 東條光彦「一般性セルフエフィカシー尺度」1986 市川悦子「看護過程展開の達成度調査票」6件法	1年短期大看護学生の実習後の自己効力感得点は上昇が見られ、実習前後で有意差が認められた。看護過程の展開の達成度得点と実習後の一般性セルフエフィカシー尺度の合計得点で優位な相関関係が認められた
19	村田 尚恵	小塩真司「精神的回復力尺度」2002 眞鍋えみ子他「臨地実習自己効力感尺度」2007	2年と4年の看護大学生の精神的回復力と臨地実習自己効力感の総得点の平均では、学年による差はなかったが、精神回復力と臨地実習自己効力感の関係は、2年生よりも4年生の方が強い相関があった。また、精神回復力低群においては、2年生に比べて4年生が「指導者との関係性維持」や「実習満足度」が有意に低かった
20	岩谷久美子	江口瞳, 寺脇孝文「自己効力感尺度」2007	男女の看護大学生と男女の看護専門学校生の実習後は女性の得点が高く有意差があった。大学と専門学校では、実習前の母性看護実践に対する自己効力感には有意差が見られず、実習後の母性看護実践に対する自己効力感、大学の得点が高く有意差があった。実習前後の母性看護実践に対する自己効力感、下位尺度全てにおいて実習後の得点が高く有意差がみられた
23	山下美智子	水木暢子他「看護実践活動に対する自己効力感尺度」2008 Sherer(成田健一訳)「特性的自己効力感尺度」1995 山下美智子他「情報源尺度」2014	3年看護大学生と1～3看護専門学校生の看護実践自己効力感には特性的自己効力感より情報源の方が強いことが示された。看護実践自己効力感には、社会人経験や学年ではなく、臨地実習での成功体験、他の学生の姿を通して代理的体験を持つことなどの正の情報源後認知することが大きく影響することが示された

(文献4, 8, 23), 「一般性セルフエフィカシー尺度 (General Self-Efficacy Scale)」¹⁵⁾ が5件 (文献5, 10, 15, 16, 26), 「臨地実習自己効力感尺度」²⁶⁾ が2件 (文献13, 19), 「自己効力感尺度」³⁴⁾ が2件 (文献2, 6) であった。複数の尺度を用いた研究が9件 (文献2, 5, 10, 13, 15, 16, 17, 19, 23) であった。

3) 質的研究

質的研究が4件であり、そのうちインタビューによる半構造化面接が3件 (文献7, 18, 22), 無記名自己記入式質問紙調査が1件 (文献21) であった。その中で1件 (文献7) は研究者が開発した自己効力感尺度³³⁾ を用いて自己効力感得点の低い大学生を研究対象に質的研究を実施していた。自己効力感の定義は、表2に記述した。文献

7, 18, 22では、特定の場面で遂行される特定の行動に影響を及ぼすという意味で、ある行動に対する自信・確信のことであると定義されていた。自己効力感を高める4要因として、①遂行行動の達成（行動の達成）、②代理的体験、③言語的説得、④情動的喚起あるとしていた。文献22では、課題を遂行する際の「～できる」というという見通しや確信であり、「成功体験」が最も影響を及ぼす要因であると定義されていた。

V. 考察

1. 自己効力感の定義

選択した23件の自己効力感の定義は、社会的学習理論—人間理解と教育の基礎—²⁴⁾、自己効力の探究「社会的学習理論の新展開」²³⁾、Self-efficacy²²⁾、激動社会の中の自己効力感²⁵⁾の心理学からであった。

Bandura, A.²²⁾ が提唱している自己効力感の引用で、定義の内容は、「個人がある状況において必要な行動を効果的に遂行する可能性の認識である」、「ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の確信である」となっていた。その他に、自己効力感を高めことに影響を与える4つの情報源として、「遂行行動の達成（行動の達成）」、「代理的体験」、「言語的説得」、「情動的状态（情動的喚起）」が重要であると捉えていた。これは、病院や施設等などの実習場所、発達段階が異なる患者の健康状態等、対象の置かれている状況が違う場合においても4つの情報源は、根拠のある基準となることが明らかとなった。4つの情報源を全て取り上げていない場合でも、「遂行行動の達成（行動の達成）」、「代理的体験」を基準としている場合があり、Bandura, A.²²⁾ が述べている最も影響を与える2つを用いて研究を行っていた。

看護を学ぶ学生のテキストに健康支援のための基本理論として、Bandura, A.²²⁾ の自己効力感が記述されており、心理学からのアプローチが通常必要になっていると考えられる。自己効力感の基

本的な考え方が一般化されてきていると思われる。「健康支援には、1つはある行動がどのような結果を生み出すかという予期（結果予期）であり、2つ目はある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという予期（効力予期）で、自分がどの程度効力予期をもっているかを認知した時、自己効力感があるという。自己効力感には、成功体験をもつこと、他人の行動を観察すること、自己強化や他者からの説得的な暗示を受けること、生理的な反応の変化を体験することの4つの情報源が影響を及ぼすといわれている」²⁸⁾と記述されている。健康を予防するためのコントロールに関連する理論に自己効力感の記述が、看護を学ぶ上で必要となっていた。

2. 研究の分類

1) 尺度開発

学生本人が認識する自己効力感を促進する情報を測定するために、1998年～2008年の間で、10年前頃に尺度開発が行われた。文献1では、学生が受け持ち患者と良い人間関係を築くための受容的・専門的・尊重的態度から構成される尺度であり、文献3は、「遂行行動の達成」、「言語的説得」、「生理的情動的状态」の3つの情報から自己効力感を測る尺度であり、文献12は、対象者、友人、指導者との関係性の維持についての尺度であり、共通しているのは、学生が実習をする時の人間の関係性が重要であると言える。文献9は、母性看護学実習での看護技術と学生を評価する尺度であり、文献11は、基礎的看護技術についての尺度であり、文献14は、人間関係形成技術、基本的看護技術、ストレス耐性から構成され、実習での看護技術を実施する場合に起きる学生の変化を尺度から捉えることで自己効力感に及ぼす影響を測ることができる。実習中に学生が関わる患者、友人、指導者、教員等の人間の関係性についての尺度、学生が実施する看護技術であるコミュニケーション等の基本的看護技術、アセスメント技術等についての尺度であった。開発された尺度では、

自己効力感に影響を与える人間関係性と実習での看護技術、そして、ストレス耐性が特に重要であることが明らかとなった。演習や実習で学生の自己効力感の具体的な項目を測る内容で、多くは客観性に乏しかったが看護学独自の開発を模索していた。

2) 量的研究

用いられた尺度は、①「特性的自己効力感尺度 (Generalized Self-Efficacy) 尺度」、②「一般性セルフエフィカシー尺度 (General Self-Efficacy Scale)」, ③「臨地実習自己効力感尺度」で、各尺度は信頼性と妥当性が証明されているものであった。また、①～③を用いて1つの尺度を使用するのではなく、複数の尺度を用いて関連性を研究していた。その他に、④研究者自身で開発した尺度を用いて、関連性を研究していた。④で文献2, 6は、研究対象者を変えて共同研究者で開発した患者と看護学生の関係性尺度とBandura, A.が提唱している「行動の達成」3項目、「代理的体験」3項目、「言語的説得」3項目、「情動的状态」2項目を5件法で関連性を研究していた。臨地実習前後の学生の自己効力感が、実習前では不安はあるが、実習後は自信が高まり、ケアの達成感、教員から認められたとの認識、学生同士での励ましが挙げられ、細部に至まで結果が示されていた。②と④で文献5では、自己効力感促進尺度の12項目をBandura, A.が提唱している「行動の達成」、「言語的説得」、「生理的情動状態」を血圧測定と導尿に分けて、実際に実施する用語を使用して作成し研究していた。教員の適切な評価や助言が演習時の学生の自己効力感を高めたと示されていた。②と④で文献9は、研究者同士で独自開発した母性看護SE尺度、23項目と母性看護FNE尺度、20項目を関連させていた。母性看護SEは学内事前実習前後で高まり、母性看護FNEは実習直前に高まり、実習を経験する過程で低下することが示された。④で文献11は、研究者同士で独自開発した看護技術55項目で自己効力感を研究して、「基礎

的な看護技術」、「高度な看護技術」、「コミュニケーション」、「問題発見・問題解決」の4つの側面から捉えて、実習前後で高まり半年後も変わることにはなかったとされていた。①～③の尺度は、信頼性と妥当性が証明されているが、これらの尺度では推し量ることのできない学生の演習や実習の自己効力感尺度を用いていることが明らかとなった。独自の尺度を用いることで、結果が他の項目との関連性を細部に至るまで示すことができること、実習での患者との関係性、母性看護学領域、基礎看護技術等、関連させる内容の違いによって尺度項目を変えることで、学生の自己効力感の本質を知る手がかりとなることが示唆された。

3) 質的研究

インタビューによる半構造化面接と質問紙調査を実施して、実習での具体的な体験から教員の指導方法が示唆されていた。文献7では、学生の自己効力感の低い理由として、自己評価が厳しいこと、目標が高いこと、人と関わることが苦手で実際に上手いかなかった体験をもっていた。自己効力感の低い学生の指導として、できるだけ具体的に学生が理解できる言葉で指導する、看護援助について具体的なアドバイスを与える、モデリングの役割を果たす、学生の努力や達成できる行為を積極的に認めることが重要であると結論づけていた。文献18では、教員や指導者だけでなく患者からのフィードバックが学生の自己効力感を高めることが明らかになり、文献21では、実習経験の積み重ねにより、患者から感謝の言葉、根拠ある看護実践の結果として患者の意識・行動が変化したことへと、成功体験の内容は高度なものに変化しており、教員・指導者の連携した指導、患者の心身の状態が安定している時期に学生主体での看護実践の機会を設け、肯定的フィードバックを行うこと、患者の診療科や、感性のレディネスに応じた指導の必要性が示唆された。文献22では、遂行行動の達成、言語的説得は人間理解の深まりやケアの具体的な評価が含まれ、体験を意味

づけること、代理的体験は働く姿・めざしたい姿のイメージ化からモデル像と出会う臨床の重要性、情動的状态は気持ちを維持する工夫をして取り組む姿勢があり、実習での共通体験では大学3年次実習に比べて4年次の成長が自己効力感を高めると結論づけていた。4件の研究は、Bandura, A.²²⁾が提唱している「行動の達成」、「代理的体験」、「言語的説得」、「情動的状态」に基づいて、学生が実習で自己効力感を高める内容と、その結果から教員が指導する上での重要な教授方法が具体的に示唆されていた。

VI. 結論

1998年以降、看護研究でBandura, A.²²⁾が提唱する自己効力感を看護学生に実習という環境で行われてきた。選択した文献のうち、尺度開発が6件、インタビュー等の質的研究が4件、尺度を用いた量的研究が13件に3分類された。

自己効力感の定義は、「個人がある状況において必要な行動を効果的に遂行する可能性の認識である」、「ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の確信である」で、自己効力感を高めことに影響を与える4つの情報源として、「遂行行動の達成（行動の達成）」、「代理的体験」、「言語的説得」、「情動的状态（情動的喚起）」が重要であるととらえていた。社会的学習理論—人間理解と教育の基礎—²⁴⁾、自己効力の探究「社会的学習理論の新展開」²³⁾、Self-efficacy²²⁾、激動社会の中の自己効力感²⁵⁾の心理学から用いられていた。

学生本人が認識する自己効力感を促進する情報を測定するために、1998年～2008年の間で、10年前頃に尺度開発が行われた。演習や実習で学生の自己効力感の具体的な項目を測る尺度で、多くは客観性に乏しかったが、看護学独自の開発を模索していた。

尺度を用いた量的研究が多く、用いられた尺度は、「特性的自己効力感尺度（Generalized Self-Efficacy）尺度」²¹⁾、「一般性セルフエフィカシー

尺度（General Self-Efficacy Scale）」¹⁵⁾、「臨地実習自己効力感尺度」²⁶⁾で、各尺度は信頼性と妥当性が証明されているものであった。また、1つの尺度を使用するのではなく、複数の尺度を用いて関連性を研究していた。その他に、研究者自身で開発した尺度を用いて、関連性を研究していた。質的研究では、Bandura, A.²²⁾が提唱している「行動の達成」、「代理的体験」、「言語的説得」、「情動的状态」に基づいて、学生が実習で自己効力感を高める内容と、その結果から教員が指導する上での重要な教授方法が具体的に示唆されていた。

文 献

- 1) 青柳道子, 野川道子編：自己効力感, 看護実践に活かす中範囲理論. 282-299, 東京, メヂカルフレンド社, 2012.
- 2) 阿部智美：患者とのコミュニケーションにおける看護学生の自己効力感 実習体験, コミュニケーションスキル, 一般性自己効力感との関連から. 宮城大学看護学部紀要, vol11, No1, 43-48, 2008.
- 3) 合田友美, 三浦浩美, 船越和代：小児看護学実習における自己効力感と実習指導評価との関連, 香川県立保健医療大学雑誌, 6, 15-22, 2015.
- 4) 飯島佐知子, 賀沢弥貴, 平井さよ子：自己効力感および職業レディネスによる看護大学生の看護管理実習の効果の評価に関する研究. 愛知県立看護大学紀要, 14 (9), 9-18, 2008.
- 5) 市川茂子：基礎看護学実習Ⅱにおける学生の自己効力感と看護過程展開の達成度との関連. 横浜創英短期大学紀要, 7, 35-42, 2011.
- 6) 岩谷久美子：看護学生の母性看護実践に対する自己効力感—母性看護学実習前後の比較—. 医学と生物学, 156 (9), 644-649, 2012.
- 7) 江本リナ：自己効力感の概念分析. 日本看護

- 科学会誌, 20 (2), 39-45, 2000.
- 8) 遠藤恵子, 松永保子, 遠藤芳子, 佐藤幸子, 井上京子, 三澤寿美, 藤田あけみ, 佐竹真次: 看護学生の自己効力感 (Self-Efficacy) に関する研究 (第1報) - 基礎看護技術演習による自己効力感の変化と影響する要因 - . 山形医療研究, 2, 19-29, 1999.
- 9) 遠藤恵子, 松永保子, 遠藤芳子, 佐藤幸子, 井上京子, 三澤寿美, 藤田あけみ, 佐竹真次: 看護学生の自己効力感 (Self-Efficacy) に関する研究 (第3報). 山形医療研究, 3, 9-15, 2000.
- 10) 奥津文子, 片山由美, 大矢千鶴, 赤澤千春, 荒川千登世: 効果的な臨地実習指導方法の検討 - 学生の自己効力感の変化と実習満足度からの一考察 - . 京都大学医療技術短期大学紀要, 22, 33-41, 2002.
- 11) 小田日出子, 焼山和憲, 中馬成子, 藤野成美, 井手裕子, 脇崎裕子, 太田祥恵: 看護学生の社会的スキルと自己効力感に関する研究. 西南女学院大学紀要, 27, 37-46, 2003.
- 12) Kathleen B. Gaberson, Marilyn H. Oermann. 1999, 勝原裕美子監訳: 臨地実習のストラテジー. 東京, 医学書院, 2002.
- 13) 片倉裕子, 高橋弘子: 看護学生が臨地実習で自己効力感を高める要因 - 4年次実習を終了した学生へのインタビューの質的記述的研究 - . 母性衛生, 54, (4), 486-494, 2014.
- 14) 狩谷恭子, 関千代子, 足立妙子, 長島緑: アロマテラピーマッサー実施後の患者インタビューに学生が同席する意味 - 臨地実習における学生の自己効力感を高める学習方法の考察. 医療保健学研究, 2, 117-129, 2011.
- 15) 坂野雄二, 東條光彦: 一般性セルフエフィカシー尺度作成の試み. 行動療法研究, 12 (1), 73-82, 1986.
- 16) 佐々木和義, 門脇千恵, 池内佳子, 竹下由紀: 看護臨地実習における学内事前実習がセルフエフィカシーに及ぼす影響: 母性看護学実習の場合. ヒューマン研究, 3, 22-29, 2002.
- 17) 佐藤美紀子, 森山美香, 矢田昭子, 秋鹿都子: 成人看護学実習 (急性期) における看護学生の成功体験. 島根大学医学部紀要, 35, 39-46, 2012.
- 18) 下村英雄, 岡美智代, 藤生英行: 臨地実習前後の看護技術に対する自己効力感の変化と関連要因. カウンセリング研究, 38, 98-108, 2005.
- 19) 菅原良, 松下慶太, 木村拓也, 渡部昌平, 神埼秀嗣: キャリア形成支援の方法論と実践. 仙台, 東北大学出版会, 143-174, 2017.
- 20) 坪井桂子, 安酸史子: 看護師の実習教育に対する教師効力に影響する状況の分析 - フォカスグループ・インタビュー法を用いて - . 日本看護教育会学会誌, 12 (2), 1-13, 2002.
- 21) 成田健一, 下仲順子, 中里克治, 河合千恵子, 佐藤眞一, 長田由紀子: 特性的自己効力感尺度の検討 - 生涯発達の利用の可能性を探る - . 教育心理学研究43, 306-314, 1995.
- 22) Bandura, A. : Self-Efficacy The Exercise of Control, New York, W.H. Freeman, 1977.
- 23) Bandura, A. 1977, 祐宗省三編: 自己効力の探究「社会的学習理論の新展開」 - . 東京, 金子書房, 1985.
- 24) Bandura, A. 1977, 原野広太郎監訳: 社会的学習理論 - 人間理解と教育の基礎 - . 東京, 金子書房, 1979.
- 25) Bandura, A. 1977, 本明寛, 野口京子監訳: 激動の社会の中の自己効力. 東京, 金子書房, 1997.
- 26) 眞鍋えみ子, 笹川寿美, 松田かおり, 北島謙吾, 園田悦代, 種池礼子, 上野範子: 看護学生の臨地実習自己効力感尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討. 日本看護研究学会雑誌, 30 (2), 43-53, 2007.
- 27) 松永保子, 遠藤恵子, 井上京子, 三澤寿美, 藤田あけみ, 佐藤幸子, 遠藤芳子, 佐竹真次:

- 看護学生の自己効力感 (Self-Efficacy) に関する研究 (第2報) —看護学生の背景と自己効力感の関連—. 山形医療研究, 2, 15-21, 1999.
- 28) 村本淳子, 高橋真理: ウイメンズヘルスナーシング概論—女性の健康と看護— [第2版]. 東京, ヌーベルヒロカワ, 2013.
- 29) 水木暢子, 木村千代子, 佐藤純子: 臨地実習における看護学生の看護実践活動に対する自己効力感の検討. 秋田看護福祉大学地域総合研究所研究所報統合3, 15-22, 2008.
- 30) 村田尚恵, 分島るり子, 古島智恵, 高島利, 井上範江: 看護学生の精神的回復力と臨地実習自己効力感および実習満足度の学年比較. 第42回日本看護学会論文集 看護教育, 38-41, 2012.
- 31) 毛利貴子, 眞鍋えみ子: 臨地実習中の看護学生におけるストレスコーピングと臨地実習自己効力感との関連, 京都府立大学看護紀要, 17, 65-70, 2008.
- 32) 百瀬由美子, 山崎章恵, 阪口しげ子: 患者との関わりにおける看護学生の自己効力感(Ⅱ) —基礎看護実習前後の比較と自己効力感を高める要因—. 信州大学医療技術短期大学部紀要, 24, 71-79, 1998.
- 33) 山下美智子, 河野由美: 看護学生の看護実践に対する自己効力感とその影響要因—情報源に着目した自己効力感モデルの検証—. 畿央大学紀要, 11, (2), 17-25, 2014.
- 34) 山崎章恵, 百瀬由美子, 阪口しげ子: 患者との関わりにおける看護学生の自己効力感(Ⅰ) —測定尺度開発の試み—. 信州大学医療技術短期大学部紀要, 24, 61-69, 1998.
- 35) 山崎章恵, 百瀬由美子, 阪口しげ子: 看護学生の臨地実習前後における自己効力感の変化と影響要因. 信州大学医療技術短期大学部紀要, 26, 25-34, 2000.
- 36) 山崎章恵, 百瀬由美子, 阪口しげ子: 看護学生の自己効力感を高める実習指導の検討—自己効力感の低い学生の実習中の体験から—. 信州大学医療技術短期大学部紀要, 27, 41-48, 2001.